

フィールドワーク入門の講義録
フィールドワークの手法と文化の概念
The Concept of Culture and Qualitative Research Methods

塚本 鋭司

TSUKAMOTO Satoshi

愛知大学国際コミュニケーション学部

Faculty of International Communication, Aichi University

この講義では国際フィールドワーク（ハワイ）の実施するにあたり、基本的な考え方を紹介します。フィールドワークとは何か、私が実施する国際フィールドワークの背景にある考え方である質的調査について、また実際にハワイでどんなことをするのかを話します。またアメリカの教育文化について一つ映画を紹介しながら説明したいと思います。

まずフィールドワークとは何かというと、フィールドにおいて何を調査や研究するかということです。フィールドというのは、日本語では現場という意味で、調査目的のために現地に赴いて、何かを調査するということです。研究といえば、本を読んで、自分で考えたことをまとめるということを想像する人がいると思いますが、フィールドワークというのは、本を読んで自分の考えをまとめるということではなくて、実際に現場へ行ってそこで観察したことを記録し、その記録をもとに、何かを発見するというのがフィールドワークの基本です。またフィールドワークと同じような意味の用語で、エスノグラフィー（Ethnography）という言葉があり、これは科学的方法で文化を記述するという意味になります。科学的な、ということは、サイエンスという意味ではありますが、ここでは社会科学の分野において科学的な手法を使うということになります。ですから、エスノグラフィーというのはある理論をもとにそれぞれの文化を記述することになります。それからもう一つよく似たものとしては、クオリタティブ・リサーチ (Qualitative Research) というのがあります。これは社会科学の分野において、いろいろな文化や社会構造を分析するというもので、主に社会学の分野で使われます。最近では心理学や言語学でも研究方法として使われます。日本語では質的調査と訳されることが多いと思います。

私はアメリカの大学院でこの質的調査を学んできましたので、もう少し詳しくお話をしたいと思います。質的調査の基礎を築いた研究者たちは、通称フランクフルト・スクー

ル (Frankfurt School) といわれるドイツの社会学者たちで、その中でも、フランツ・ボア (Franz Boas) という学者がいて、彼は心理学者であり、文化については文化相対主義的な考えを持った人です。彼によれば、それぞれの文化は帰納法的にアプローチすることによって研究が可能であるということを言っています。またアメリカにおいては 1920 年代からシカゴ学派 (Chicago School of Sociology) といわれる、シカゴ大学で教鞭を執る社会学者たちが、シカゴのスラムへ行ってそこに住む人々の様子をフィールド・データをもとに分析し、アメリカの貧民街が抱える社会問題を研究し始めました。その中でロバート・パークス (Robert E. Parks) という学者は、1910 年代半ばからシカゴのスラムで人種の問題を分析したり、都会における人類生態学をはじめました。彼はスラムに住むホームレスの人々や、少数民族民族の人たちがどのような暮らしをしているのかということに関心があり、そのことについて研究を行なったのです。英語ではソーシャル・ネイチャー・オブ・リアリティー (Social Nature of Reality) といって、これらの人々がどのような社会で暮らし、どのような社会構造の中に組み込まれているのか、また彼ら自身どのような問題を抱えているのかということを研究の対象にしました。

次に質的調査方について話します。質的調査法においては 4 つの特徴があります。まず第一に自然的、英語ではナチュラリスティック (Naturalistic) といって、実際に現地へ赴き、そこでデータを集めることを指します。これはフィールドワークという語の意味と同じになります。他の言葉でいえば、現地主義もしくは現地を重視するということで、研究対象となる現象が実際に起こる場、またその環境が現象を理解するのに非常に重要であるという考え方です。第二の特徴としては、描写的な資料、英語ではディスクリプティブ・データ (Descriptive Data) をもとに研究を行うということです。このディスクリプティブ・データというのは、現実起こった事を、詳細に記述するということです。この場合どのような現象であろうとも、研究の対象である現象をより深く理解することにつながる可能性を秘めていますので、予めこのことが重要であろう、このことはそんなに重要ではない、というふうなフィルターをかけるのではなく、気づいた事は何でも詳細に記述をしておくことが大切だということです。第三の特徴としては、過程が大切である、ということです。過程、つまりその現象がどうして起こるのか、その原因から結果までのプロセスを理解するのが重要ということで、質的調査法においては結果がどうということであるというよりは、むしろその結果に至る過程が重要であると考えます。人々はその現象をどのように理解して、意味を引き出すのか、また意味を見いだすのか、またどうしてある考え方が常識として通用するのか、ということを研究するのは非常に大切です。つまり人々が社会生活をする上においてどのような事柄にどのような意味合いを持たせているのか、また見いだすのかということを調査するのが質的調査法の特徴の 1 つであります。そして第四の特徴としては、帰納的論理に基づき、具体例を分析し

て、一般法則を抽出することです。英語ではインダクティブ・リーズニング (Inductive Reasoning) といいます。具体的な事象を分析して、そのさまざまな事象の中にある共通項を見つけ一般化するということです。これは詳細に記述されたデータを分析し、そこから一般化された考えを見つけ出すということになります。実証主義的に、あらかじめ仮説を立てておいて、その仮説を証明するというのではなく、集めたデータを分析して、その中から共通項を発見し、一般化できる理論や考え方を示すということです。あらかじめ研究者は何かの仮説を頭において研究するという訳ではありません。むしろ大雑把ではあるけれども、研究の方向性だけは決めておいて、データを分析するその過程において何か新たな発見を目指す研究が質的調査法です。

ここで私がどうして質的調査法ということを説明したかと申しますと、この調査法と私が行う国際フィールドワークには密接な関係があるからです。私自身がアメリカの大学院で質的調査法のクラスを取った時、教室へ行ったりまた教室外の違うところへ行ったりインタビューをしたりして、かなりの量のフィールドノートを書きました。その時に文化を記述するということがいかに大切かということを実感しましたし、それが英語学習においてもかなりの効果を上げるということに気がつきました。ですからこの質的調査法の基本的な考え方を言語習得に応用したのが、私の行う国際フィールドワークとなります。このような国際フィールドワークの背景となる考え方を皆さんに伝えておくことは、とても重要だと思います。

次に、文化という概念について考えてみたいと思います。英語で文化を示すカルチャーという言葉が英語圏で初めて使われたのは、マシュー・アーノルド (Matthew Arnold) というイギリスの文化評論家によってであります。彼のカルチャー・アンド・アナキー (Culture and Anarchy) という著書の中に、文化というものが定義されていますが、それは今でハイ・カルチャー (High Culture)、つまり上流階級の人たちが楽しむ文化ということで定義がされています。その本の中には、Culture, which is the study of perfection, leads us, ... to conceive of true human perfection as a harmonious perfection, developing all sides of our humanity; and as a general perfection, developing all parts of our society (p.11) と書かれています。

英語で文化、つまりカルチャーという概念は様々な定義がされています。まず第一に知的、もしくは精神的な価値観というようなことを意味し、これは主に文化人類学で用いられる概念です。次に社会的慣習や行動様式という意味で文化という語が使われます。これは主に社会学の分野において使われると思います。また第三の定義としては、知的なもしくは芸術的な活動という意味で文化が使われます。これは主に文学や芸術などの分野において使われます。第四に、1980年代からよく使われるようになった文化の定義として、文化というものは権力を持った人たちと、権力を持たない人たちとの葛藤の

場であるというものがあります。これはイギリスのバーミンガム大学でスチュアート・ホール (Stuart Hall) が唱えた文化の定義になります。第五に、フランスの歴史学者で哲学者であるミシェル・フーコー (Michael Foucault) によると、文化というものは万人に対して開かれているけれども、何らかの方法で人々を選別する機能を持った装置であり、社会に階層を作り出しそれを維持する組織であると唱えています。このミッシェル・フーコーが唱える文化とは、要は文化という概念の中に階層化が既に存在し、ある特定の価値を生み出す知識にアクセスできるのはある特定の人々であり、その知識にアクセスできる人たちが権力を持つ、もしくはそこから権力が生まれるということです。また違った見方をするならば、最下層の人たちというのは、そのような情報や知識にアクセスすることがむづかしい、もしくはできにくい社会の辺境地に住んでいるということがいえます。ミシェル・フーコーが権力という概念を唱えた時に、こういった文化に対する考え方が出てきました。

先ほど言いましたハイ・カルチャーというものは上流階級の人々がたしなむもので、ヨーロッパではオペラ、クラシック音楽、などが好まれました。それに対してロー・カルチャー (Low Culture) という言葉もあり、これはヨーロッパではそれほど使われないかも知れませんが、アメリカにおいては、伝統的にジャズというのがロー・カルチャーに分類されます。それはどうしてかと申しますと、ジャズは、アメリカのルイジアナ州ニューオーリンズにおいて、今から 120 年ほど前にはじまった音楽です。その当時奴隷制度はもう廃止されていましたが、それに近いような労働条件で働かされていた人々がいて、休みの時にみんなで集まって楽器になりそうなものを使って、音楽を演奏して楽しんだということがあります。その後その音楽はミシシッピ川を渡り、シカゴへたどりつき、それがブルースになり、またシカゴからニューヨークへその音楽が伝承され、現在のジャズというものになりました。また歴史的にみて、デキシーランド・ジャズというのは、大編成のオーケストラで演奏するもの、それから 4 人で演奏するカルテット、もしくは 5 人で演奏するクインテットというような少人数編成でジャズが演奏されることがあります。アメリカでは、ジャズの演奏者はアフリカ系アメリカ人が大多数のため、人種に対する偏見がありました。さらにジャズの演奏は午後 10 時から午前 4 時ぐらいまでに行われることが多く、いつもお酒を飲んでいるような人たちがジャズを演奏するというステレオタイプが長い間あり、これらがジャズがロー・カルチャーとしてみなされた理由です。しかしながら、現在はヨーロッパや日本において、ジャズがロー・カルチャーというようにみなされることはありません。それはアメリカと違って、ヨーロッパや日本において、ジャズ演奏家に対しての偏見があまりなかったからだと思います。

1970 年代からハイ・カルチャーとロー・カルチャーとの間にポピュラー・カルチャー、

もしくはポップ・カルチャーという文化が出てきました。これはハイ・カルチャーとロー・カルチャーの中間地点に位置するもの、もしくはハイ・カルチャーとロー・カルチャーが融合した文化と考えられます。一番わかりやすい例でいいますと、ミュージカルがこのポピュラー・カルチャー、もしくはポップ・カルチャーの代表例になると思います。オペラほど格式張らず、オペレッタほど庶民的でもなく、中流階級の人々から上流階級の人々まで楽しめるようなわかりやすい物語性、またバレエ・ダンスほど優雅ではないが、随所におもしろい踊りを加え、歌と踊りを融合させた芸術がミュージカルといえます。現在ではニューヨークのブロードウェイを始め、ロンドンのウエスト・エンドや他の大都市においても継続的に上演されることがあります。そしてもう一つポピュラー・カルチャーの例としては、音楽におけるポップ・ミュージックを挙げることができます。現在においては、歌のみならずダンスとの融合、もしくは映像を使って音楽を提供するという舞台芸術に力をいれているアーティストもいます。このように 1970 年代からポピュラー・カルチャーというのは非常に文化としての力を持ってきて、カルチュラル・スタディーズという文化を研究する学問分野も 1980 年代にできました。

次に、国際フィールドワーク（ハワイ）において、皆さんがどのように調査を進めるのか、その手順について説明したいと思います。まず第一に研究対象を決めるということが必要ですが、これは私の方で決めたいと思います。この研究対象というのは訪問地によってある程度制限をされるもので、今までフィールドワークを行ったときには、アメリカの教育、アメリカのビジネス、などをテーマとしました。今回行うハワイのフィールドワークにおいては、ハワイにおける日系人の歴史、ハワイの観光産業、ハワイの教育などが研究のテーマになると思います。次に観察する場所を決めるということになりますが、これもフィールドワークをみんなで一緒にすることになります。1 人で自由に行動するということは治安や安全の面を考えるとアメリカではなかなか難しいので、参加者全員が同じところへ行くことになります。その中で自分が興味の持った場所やテーマについて調査してもらえれば良いと思います。それから研究対象について理解深めるということが重要になりますが、これは国際フィールドワーク（ハワイ）I の授業において勉強することになります。今回ハワイでフィールドワークを実行することになるので、日系人のハワイに関する英語の文献や、ハワイにおける観光産業の状況について英語の論文で読んでもらいます。それから日系人がハワイでうけた教育についての英語の文献も読んでもらおうと思います。このような準備を事前学習である秋学期の授業で勉強してもらいます。またハワイの歴史や文化ばかりではなく、現地でどのようにフィールドノートをとったらよいのかという方法論についても学習してもらおうと思います。このような準備を行った後、実際にハワイ州へ行くことになります。このとき、実際にフィールドワークをするわけですが、主に観察という方法で、いろんなこ

とを調査することになると思います。じかに人々にインタビューする機会も多少はありますが、多くの場合は、グループである所へ行って、話を聞いたり、いろいろなことを観察することが、フィールドワークの中心になると思います。もちろんハワイではすべて英語で行うわけですから、すべてが聞き取れるわけではないと思います。その場合は私も皆さんと同じようにメモ取り、その日のフィールドでの活動が終わった後、ホテルに戻ってきからロビーで、その日に訪問したところで聞いた話を日本語でまとめて皆さんにお伝えします。そうすることによって、英語で理解できなかった所は日本語で理解してもらうことになります。しかしながら、この国際フィールドワーク（ハワイ）では、なるべく多くの機会に生の英語に触れてもらうということが大切ではないかなと思います。

いろいろなメモとった後、春学期の授業においては、そのメモをもとに、フィールドノートを書いてもらう予定です。訪問したところ全部についてのフィールドノートを作成するのはかなり大変ですので、皆さんが興味を持ったテーマに即して、そのテーマと関連のある場所で見聞きした事を英語でまとめてもらえれば良いかと思います。そのフィールドノートをもとに、さらに見聞きしたことの背後に何があるのかを分析して、最終的に英語でレポートを書いてもらいます。もちろんその英語のレポートは私の方で添削して、その後に皆さんの書いたレポートをまとめて、報告書を作成します。また春学期の授業においては、皆さんが調査した事柄について英語で論文をまとめたものを、パワーポイントを用いて英語で発表してもらいます。そうすることにより自分の研究のことをより明確に把握できるようになると思います。以上がこの国際フィールドワーク（ハワイ）についての説明になります。

それから実際にフィールド現場へ出た場合に気をつけておくべきことについて簡単にお話ししたいと思います。アメリカでは話を聞いた場合に、必ずといっていいほど話した人は、聞いた人に対して、**Do you have any questions ?** というようなことを聞きます。これは日本では質問をすることは理解できてないから恥ずかしいということにつながると思いますが、アメリカにおいては質問をすることは、あなたの話をしっかりと聞いていたので、もっと質問したいという意味合いがあります。ですから何か話を聞いた場合に質問をしないというのは、あなたの話はつまらなかった、もしくはあなたの話はよくわからなかった、ということを意味します。これは日本とはだいぶ違った解釈の仕方だと思います。ですからアメリカにおいて、話を聞いたら必ず質問をするように心がけてください。そうすれば話した人は気分良くいろいろなことを話してくれますし、ひょっとして非常に重要なことを教えてくれる場合もあります。ですから、なるべく質問することが調査においてとても大切だということを覚えておいてください。それから現場においては前にも申し上げたように、細かいメモをとることが必要です。気づいた

事ならなんでもメモ取るぐらいにした方がいいかもしれません。ある現象をどのように分析したらよいのか、そのヒントが細かいメモを取ることによって後々分かってくるものがよくあるからです。それから英語で話を聞くわけですから、理解が出来なかったり、後でもう一回聞きたいということがあると思います。そのような場合にはボイスレコーダーを使って、話しているところを録音しても良いと思いますが、そういった場合には事前に話す人に録音してもいいかどうか許可をとって下さい。皆で話を聞く場合には、私があらかじめ許可を取るようにしたいと思いますが、個人で話を録音したい場合には、必ず録音してもいいかどうか許可をとって下さい。また国際フィールドワーク（ハワイ）ではアシスタントが一人ついてきます。そのアシスタントの方は話をビデオに録画して、皆さんが日本へ帰ったらそれを観られるようにします。映像としても帰国後、確認することができるので、フィールドノートを作る時に参考にすることができます。

次にアメリカの映画を通してアメリカの文化を少し紹介したいと思います。映画名はリーガリー・ブロンド (Legally Blonde)、日本名はキューティー・ブロンドという映画があります。この映画の中ではアメリカの法科大学院の授業の様子、またアメリカの大学のソロリティーについての様子を見ることができます。ストーリーを簡単に紹介しますと、ファッションを専攻する女子学生が、ボーイフレンドにふられ、そのボーイフレンドがハーバード大学法科大学院へ入学します。それに腹を立てた女子学生は、猛勉強をして、そのボーイフレンドを見返してやろうと、同じ時期にハーバード大学法科大学院に入学します。そしてその女子学生は、最初はその大学院の雰囲気になじむことができず、いろいろと困難にぶち当たりますが、次第にその環境にも慣れ、最終的には首席で卒業するという物語です。

この映画の中でとても興味深いのは、まず学部生の時に彼女はファッションを専攻していますが、その時彼女はソロリティーという組織に属しています。これは映画の中ではあまりはっきりとは分かりませんが、よく観てみると、ひとつの大きな家の中に、学生たちが数十名住んでいます。そこで共通の関心を持った学生たちがお互いに励まし合って、共同生活をしています。そういったソロリティーという組織は、アメリカの大学でしか見られない独特な大学文化です。男性の組織をフラタニティー、女性の組織をソロリティーといっていますけれども、同じ関心や興味を持った学生が共同生活する組織で、入会するにはメンバーのインタビューを受ける必要があります。通常はキャンパス内にあるソロリティーハウスに住むのですが、そこに住まないメンバーもいます。ソロリティーの名前はギリシャ文字3文字なので、グreek・ライフ (Greek Life) と呼ばれることもあります。

このリーガリー・ブロンドにおいて、アメリカの法科大学院の様子を垣間見ることができます。アメリカの法科大学院においては、ソクラテス方式といいまして、教授が学

生に対して質問に投げかけ、それを学生が答えるという形式をとることがあります。教室には30人や50人と学生がいますが、教授は質問を投げかけ、挙手した学生に答えてもらい、更に質問をします。そこではまるで禅の問答のようなやりとりになることもあります。教授と学生との一対一のやりとりが、教室で行われますが、そのやりとりに対して自分の意見を挟もうと別の学生が挙手して、意見をいうこともあります。また一人の学生が答えに窮したとき、教授がほかの挙手している学生を当てることもあります。そうすることにより、1つの問題点について深く多角的に意見を出し合って理解深めるのが、ソクラテス方式と呼ばれる教育方法です。

またこの映画の中では教授と学生との関係についても興味深いことが窺われます。ある教授は、予習をしてない学生に対しては、教室を去るように命令をし、他の学生も予習をしてない学生はこの教室に入る資格がないと言う場面があります。このようにアメリカの法科大学院においては、予習を前提とした授業が行われます。この映画は非常にストーリーが面白く、またアメリカの大学教育について理解を深めるためにも非常に役に立つ映画ですので、ぜひ皆さん時間があれば観てください。

今回の講義では、フィールドワークとは何か、それに関連する学問体系の説明、文化の概念、国際フィールドワーク（ハワイ）の授業の説明と実際のフィールドワークで行うこと、そして最後に一つアメリカの映画を使って、アメリカの教育文化について説明しました。

参考文献

Arnold, Matthew. *Culture and Anarchy*. New York : Cambridge University Press, 1932.